

10月18日 — 本番2週間前

北澤 潤

今朝起きて驚いた。昨日Facebookにインドネシア語で投稿したNOWHERE OASISの情報が、大量にシェアされていた。普段の自分の投稿に対する反応と比べたら異常な数だ。シェア数は500を超えた。拡散しているのは、ほぼ全てが日本に住んでいるインドネシア人たちだった。「これほんと?」「いきたい!」といった直感的な反応から、「インドネシアの日常は幸せ、消費されない。日本と全然違う。」といった意見、「できるの?」「許可は?」「路上で?」などのコメントもあった。

これは、NOWHERE OASISの一側面を本番に先んじて表した現象だと思う。すき間の時間をエンジョイするのではなく、忙しかろうと緩やかに生き、今この瞬間を楽しむインドネシア人たちの多くが共通して持つ精神は、日本のシステム化された社会のマインドの中で生き延びることが至極難しい。インドネシアで生まれ育った人が、日本で「日本的」に過ごすことは相当タフだ。もちろん家庭を持ち、友人を持ち、幸せに生きている人もたくさんいるし、日本のカルチャーが好きで暮らしている人も多い。ただ社会全体の空気感として、ここは彼らに「オアシス」を与えてはくれない。

「アンクリンガン」が日本に出現することは、彼らにとってまさに「どこにもないオアシス」がやってくる、夢のような出来事だろうと想像できる。飛び込んできた情報を見た人のうちの誰かが、実際にアンクリンガンへと辿りつき、東京の空気から幕一枚隔たれた空間で過ごすとき、そこが「いまここにあるオアシス」となってほしい。

もしも彼らが大勢訪れて、アンクリンガンがインドネシアの人でいっぱいになる、なんてことがあるとしたらどうだろう。分からない言語ばかりが行き交い、当たり前のように自ら売り物を手に取って食べ始め、他人なのに距離がやたらと近い。ローカルルールで充満した空気に耐え難く、いづらさを感じる人もいるだろう。ただこの社会は、そのいづらさと似た感覚を、同じ社会の中にいる誰かに常々与えてしまっていないだろうか。

北澤 潤(美術家)

1988年東京生まれ、ジョグジャカルタ拠点。東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。合同会社北澤潤八雲事務所代表、STUDIO BELIMBINGディレクター。ワールドワークを通して「ありえるはずの社会」を構想、さまざまな人々との協働のもとにその現実化に取り組むプロセスを芸術実践とする。2016年、米経済紙Forbes「30 Under 30 Asia」アート部門選出。

フェスティバル/トーキョー実行委員会	
顧問	野村 萬 （公社）日本芸能実演家団体協議会会長 能楽師
名誉実行委員長	高野之夫 豊島区長
実行委員長	福地茂雄 （公財）新国立劇場運営財団 顧問 アサヒビール株式会社 社友
副実行委員長	市村作知雄 NPO 法人アートネットワーク・ジャパン 顧問 藤田 力 豊島区文化商工部長 東澤 昭 （公財）としま未来文化財団 常務理事／事務局長
委員	尾崎元規 （公社）企業メセナ協議会 理事長 花王株式会社 顧問 熊倉純子 東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科 教授 近藤佳代子 アサヒグループホールディングス株式会社 サステナビリティ部門 セネラルマネジャー 鈴木正美 東京商工会議所豊島支部 会長 永井多恵子 公益財団法人せたがや文化財団 理事長 渡邊圭介 豊島区文化商工部文化デザイン課長 岸 正人 （公財）としま未来文化財団 劇場運営課長 蓮池奈緒子 （公財）としま未来文化財団 あうるすぽっと （豊島区立舞台芸術交流センター）支配人 米原品子 NPO法人アートネットワーク・ジャパン 理事長 長島 雄 フェスティバル/トーキョー ディレクター 河合千佳 フェスティバル/トーキョー 共同ディレクター 章原円花 フェスティバル/トーキョー 事務局長
監事	能登絹代 豊島区総務部総務課長
法務アドバイザー	福井健策、北澤尚登（弁護士通り法律事務所）

フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局	
ディレクター	長島 雄
共同ディレクター	河合千佳
事務局長	章原円花
制作	荒川真由子、松宮俊文、武田角子、新井雅章、岡崎由実子、神永真美、平田幸奈、藤井友理、長田崇史、西宮章吾、山縣昌雄、岩間麻衣子、TASKO.inc(小森あや、加藤夏帆) 森川清成、金井美希、松波春奈、鈴木千尋
制作アシスタント	
広報チーフ	小倉明紀子
広報	神永真美、岡崎由実子、細川浩伸、横田あす美
票券	武井和美
票券アシスタント	河野 遥
渉外	吉田幸恵
経理	堤 久美子、株式会社countroom(五藤 真、中山恭一、信国輝彦)
総務	米原品子、藤島藤希
技術監督	寅川英司
技術監督アシスタント	横川奈保子
照明コーディネーター	水下尚己 (株式会社ファクター)
音響コーディネーター	相川 晶 (有限会社サウンドウィーズ)
アートディレクション	高田 唯 (Allright Graphics)
デザインコーディネーター	北條 舞 (Allright Graphics)
デザインイラスト	山田智美、齊藤拓実 (Allright Graphics)
PR動画、音楽	芳賀あきな
PR動画	東郷清丸 (Allright Music)
ウェブサイト	ダイノサトウ
海外広報・翻訳	相澤 俊 (株式会社Mtame)
コピーライティング	ウイリアム・アランドリューズ
映像プログラム・キレター	鈴木理映子 小山ひとみ
主催	フェスティバル/トーキョー実行委員会 豊島区／公益財団法人としま未来文化財団／NPO法人アートネットワーク・ジャパン、東京芸術祭実行委員会（豊島区、公益財団法人としま未来文化財団、フェスティバル/トーキョー実行委員会、公益財団法人東京都歴史文化財団（東京芸術劇場・アーツカウンシル東京））

オープニングプログラム主催	文化庁、独立行政法日本芸術文化振興会「トランスワールド from アジア」共催 国際交流基金アジアセンター
協賛	アサヒグループホールディングス株式会社、株式会社資生堂
後援	外務省、公益社団法人日本芸能実演家団体協議会、J-WAVE 81.3 FM
特別協力	西武池袋本店、東武百貨店池袋店、東武鉄道株式会社、サンシャインシティ、ジュンク堂書店池袋本店、株式会社ヒューマックスシネマ、理想科学工業株式会社、有限会社アップリンク
協力	東京商工会議所豊島支部、豊島区商店街連合会、豊島区町会連合会、一般社団法人豊島区観光協会、一般社団法人豊島産業協会、公益社団法人豊島法人会、池袋西口商店街連合会、特定非営利活動法人ゼファー池袋まちづくり、ホテルメトロポリタン、ホテルグランディシティ、池袋ホテル会、サンシャインシティ・プリンスホテル、リソルホテル株式会社
宣伝協力	株式会社ポスターハリス・カンパニー、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館

	令和元年度 文化庁 国際文化芸術祭発掘拠点形成事業 (豊島区国際アート・カルチャー都市推進事業)
	オープニングプログラムは、「2019年度日本博を契機とする文化資源コンテンツ創成事業」として、文化庁、独立行政法人日本芸術文化振興会との主催により開催いたします。
	フェスティバル/トーキョー19は東京芸術祭2019の一環として開催いたします。
	フェスティバル/トーキョー19は東アジア文化都市2019豊島と連携して開催いたします。
	フェスティバル/トーキョー19は日本・ポーランド国交樹立100周年記念事業に参加しています。

	公益財団法人としま未来文化財団 Toshima Mirai Cultural Foundation
	ANJ Arts Network Japan
	東京芸術劇場 Tokyo Metropolitan Theatre
	ARTS COUNCIL TOKYO
	

発行：フェスティバル/トーキョー実行委員会 〒171-0031東京都豊島区目白5-24-12 旧真和中学校4F TEL：03-5961-5202 FAX: 03-5961-5207 https://www.festival-tokyo.jp/18.html

編集：フェスティバル/トーキョー実行委員会事務局

Festival/Tokyo Executive Committee
Advisor: Man Nomura (Chair, Japan Council of Performers Rights & Performing Arts Organizations; Noh actor)
Honorary President of the Executive Committee: Yukio Takano (Mayor of Toshima City)
Chair of the Executive Committee: Shigeo Fukuchi (Advisor, New National Theatre Foundation; Senior Alumnus, Asahi Breweries, Ltd.)
Vice Chairs of the Executive Committee: Sachio Ichimura (Adviser, NPO Arts Network Japan) Chikara Fujita (Director, Culture, Commerce and Industry Division, Toshima City) Akira Touzawa (Secretariat Director, Toshima Mirai Cultural Foundation)
Committee Members: Motoki Ozaki (President, Association for Corporate Support of the Arts; Corporate Advisor, Kao Corporation) Sumiko Kamakura (Professor, Graduate School of Global Arts, Tokyo University of the Arts) Kayoko Kondo (General Manager, Sustainability Section, Asahi Group Holdings, Ltd.) Masami Suzuki (Chair, Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima) Takao Nagai (Chair, Setagaya Arts Foundation) Ketsuke Yamanabe (Director, Cultural Design Section, Culture, Commerce and Industry Division, Toshima City) Masato Kishi (Executive Manager, Toshima Mirai Cultural Foundation) Naoko Hasuike (Toshima Mirai Cultural Foundation; Executive Director, Owispot Theatre / Toshima Performing Arts Center) Akiko Yonehara (Representative, NPO Arts Network Japan) Kaku Nagashima (Director, Festival/Tokyo) Chika Kawai (Co-Director, Festival/Tokyo) Madoka Ashihara (Administrative Director, Festival/Tokyo)

Supervisor:
Kinuyo Noto (Director, General Affairs Section, General Affairs Division, Toshima City)
Legal Advisors:
Kensaku Fukui, Hisato Kitazawa (Kotto Dori Law Office)

Festival/Tokyo Executive Committee Secretariat

Director: Kaku Nagashima
Co-Director: Chika Kawai
Administrative Director: Madoka Ashihara

Production Coordinators:
Mayuko Arakawa, Toshifumi Matsumiya, Yuko Takeda, Wakana Arai, Yumiko Okazaki, Mami Kaminaga, Saki Hirata, Ysuri Fujii, Takashi Osada, Shogo Shinomiya, Masao Yamagata, Maiko Iwama, TASKO inc.(Aya Comori, Naho Kato)
Production Assistants: Kiyonari Morikawa, Miki Kanai, Haruna Matsunami, Chihiro Suzuki

Public Relations Director: Akiko Ogura
Public Relations: Mami Kamnaga, Yumiko Okazaki, Hironobu Hosokawa, Asumi Ueda

Ticket Manager: Kazumi Takei
Ticket Administration: Haruka Kawano
Liaison Officer: Yuki Yoshida
Accounting: Kumiko Tsutsumi, coutntroom (Makoto Gotoh, Kyoichi Nakayama, Teruhiko Nobukuni)
Administrators: Akiko Yonehara, Maki Fujishima

Technical Director: Eiji Torakawa
Assistant Technical Director: Naoko Yokokawa
Lighting Coordination: Naoki Kinoshita (Factor Co., Ltd.)
Sound Coordination: Akira Aikawa (Sound Weeds Inc.)

Art Direction: Yui Takada (Allright Graphics)
Design Coordinator: Mai Hojo (Allright Graphics)
Design: Tomomi Yamada, Takumi Saito (Allright Graphics)
Illustrations: Akina Hago
PR Video Music: Kiyomaru Togo (Allright Music)
Publicity Video: Dino Sato
Website: Shun Aizawa (Mtame, Inc.)

Overseas Public Relations, Translation: William Andrews
Copywriting: Rieko Suzuki
Chinese Program Curator: Hitomi Oyama

Organizers: Festival/Tokyo Executive Committee (Toshima City, Toshima Mirai Cultural Foundation, NPO Arts Network Japan [NPO-ANJ]), Tokyo Festival Executive Committee (Toshima City, Toshima Mirai Cultural Foundation, Festival/Tokyo Executive Committee, Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture [Tokyo Metropolitan Theatre & Arts Council Tokyo])

Opening Program organized by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan and Japan Arts Council "Transfield from Asia" co-organized by the Japan Foundation Asia Center

Sponsored by Asahi Group Holdings, Ltd., Shiseido Co., Ltd.
Endorsed by the Ministry of Foreign Affairs, GEIDANKYO, J-WAVE 81.3 FM
Special cooperation from SEIBU IkebukuroHONTEN, TOBU DEPARTMENT STORE Ikebukuro, TOBU RAILWAY CO., LTD., Sunshine City, Junkudo Ikebukuro, HUMAX CINEMA INC., RISO KAGAKU CORPORATION, UPLINK

In cooperation with Tokyo Chamber of Commerce and Industry Toshima, Toshima City Shopping Street Federation, Toshima City Federation, Toshima City Tourism Association, Toshima Industry Association, Toshima Corporate Taxpayers' Association, Ikebukuro Nishiguchi Shopping Street Federation, NPO Zephyr, Hotel Metropolitan Tokyo Ikebukuro, Hotel Grand City Ikebukuro, Ikebukuro Hotel Association, Sunshine City Prince Hotel, RESOL HOTEL Co., Ltd.

PR Support: Poster Hari' s, The Tsubouchi Memorial Theatre Museum, Waseda University

Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the fiscal 2019
Opening Program organized with the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan and Japan Arts Council
Festival/Tokyo 2019 is organized as part of Tokyo Festival 2019.
Festival/Tokyo 2019 is held in partnership with Culture City of East Asia 2019 Toshima.
Festival/Tokyo 2019 is an associated program in the 100th Anniversary of the Establishment of Diplomatic Relations between Poland and Japan in 2019.

ノーウェア・オアシス

NOWHERE OASIS

コンセプト・ディレクション：北澤 潤

NOWHERE OASIS

Conceived and Directed by Jun Kitazawa

11.1 Fri — 11.10 Sun

東京芸術劇場 劇場前広場 ほか

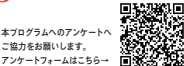
Tokyo Metropolitan Theatre (front plaza)

and other locations



フェスティバル/トーキョー 19 主催プログラム

FESTIVAL / TOKYO



本プログラムへのアンケートへご協力をお願いします。アンケートフォームはこちら

東京とジョグジャカルタの路上から

「公と私」を考える

対談：北澤潤×森真理子

「NOWHERE OASIS」ではインドネシア式屋台が池袋の各所に出現し、薄いシート1枚で公的空間と隔てられた内側では、人々が「どこにもないオアシス」へ思いを馳せる。同作をめぐり、作者の北澤潤と、旧知のアートプロデューサー、森真理子が語る。



アートプロジェクトでの「配役」と「演出」

森 今回、北澤さんとF/Tの組み合わせに意外さを感じたのと同時に、きっと相性が良いだろうという気持ちもありました。これまでの北澤さんのアートプロジェクトに、演劇とも似た部分を感じていたからです。たとえば、私も企画側として一緒に、京都・舞鶴市でのアートプロジェクト《時間旅行博物館》(2013～2015)。近代化遺産「赤れんが配水池」を活用したプロジェクトでした。

北澤 かつて大量の水が流れていた場所に、今度は「時」を流すように、舞鶴の過去・現在・未来を旅する「博物館」として蘇らせる3年計画の取り組みでした。1年目は僕の発案した参加型展覧会を行い、2年目には市民から「時間旅行学芸員」を募集。そこから彼らの発案企画も生まれ、3年目には、誰もが時間旅行をテーマにした表現を出展できる「タイムトラベルコレクション」につながりましたね。

森 当時の北澤さんの立ち回りが、演出家のような振る舞いだと感じたんです。例えば、市民学芸員の募集は、参加者に「あなたたちは学芸員です」という「役」を与え

たととれる。他にも多様な関係者によってプロジェクトが成り立つ状況で、北澤さんの「配役」や目端の利かせ方は印象的でした。関連して、北澤さんは日常に「別の日常」としての非日常を効果的に取り入れることも多いですね。たとえば団地の空き部屋を期間限定のホテルにした《サンセルフホテル》(2012/2014)では、太陽光発電電を利用した大きな光るバルーンがそうだったと思います。

北澤 このホテルでは、宿泊客の滞在をサポートする「ホテルマン」などの役割で、団地の住民の方々に参加してもらいました。そこでは日中に、宿泊客とホテルマンが太陽光発電パネルを積んだ台車「ソーラーワゴン」で近所を歩いて蓄電し、夕暮れ時にはその電力で、太陽に見立てた光る大型バルーンを空に浮かべます。それが消えるころ、部屋の電気も尽きて就寝を迎えるわけです。

森 そうした「山場」のつくりかたも、ドラマやカタルシスのなものを生み出していると思ったのです。



問題意識の根底をゆるがしたインドネシア移住

森 私が《時間旅行博物館》で北澤さんにオファーした理由のひとつに、良い意味での「作家性の薄さ」がありました。あえてこういう言い方をするなら、地域の人を「自分たちでやった気にさせてくれる」というか。でも同時に、結構危ない橋を渡っているなとも感じました。関わり方の距離感ひとつとってもそうですし、集まる人たちの意識で作品が大きく左右されるような動き方ですから。

北澤 だいたい最初は「あいつは何者だ」から始まって、そのうち「ジュン」とか「きたばん」などと呼んでもらうようになります(笑)、地元の人たちと仲良くなります。その過程では既存の価値観と結構戦うこともあり、言葉を尽くして新しい価値観が生成されるところまでやってきたつもりです。

森 その後、2016年に国際交流基金のアジア・フェローとしてジャカルタに1年間滞在。さらにジョグジャカルタに拠点を移しましたね。

北澤 もちろん現地に関心がありましたが、自分がしてきたことの先に何があるのかという気持ちと、このまま続けると「企画屋」になってしまいそうな危機感もあり、ここでいったん距離を置いて考えようと思いました。でもインドネシアに着いたら、そのこと以上に現地社会で強い影響をドーンと受けたんですね。

森 どういうことでしょうか？

北澤 それまで、東京育ちである自分の中から生まれた疑問が活動内容とも強く関わっていたと思います。東京では人々の「役割」がとてもはっきりしている気がする。お店、学校、職場などそれぞれの場で、各個人の持つ／与えられる役割です。僕はそうしたコミュニティに対して、どこか窮屈というか、違和感がありました。だからこそ、その編み直しや再創造が、自分にとって「これしかない!」というくらい大きな問題意識だったのだと思います。

森 インドネシアでは、その前提自体がゆさぶられた？

北澤 インドネシアにきたら、みんな「役割」がすごくユルいと感じたんですね。首都のジャカルタでも、コンビニで勤務中の店員が堂々と歌を歌いながら、商品棚を挟んで同僚とおしゃべりしていたりする。また路上のあちこちで仲間同士が座り込んで、思い思いに過ごしています。インドネシアには僕が仮想敵としてきたような社会がそもそもないのではと思えた。「自分がやってきたことって何だったんだ?」という感じです。そしてこのことは、今回の「NOWHERE OASIS」にも通じています。

移住で生じた「どっちつかず」の立ち位置から考える

森 それでは、「NOWHERE OASIS」について伺えますか？

北澤 このプロジェクトは、移住後の個人的な問題意識と、公共空間に対する意識の双方から生まれました。個人的問題とは、日本を離れてインドネシアに移動した結果の、「どっちつかず」で「どちらでもある」自分の立ち位置です。特に移住当初は、拠点と決めた場所でも「外国人」の矢印がこちらに向かってきたん



ですね。逆に一時帰国すると、身体がインドネシア化していて、日本語がすぐ出てこなかったりする。一方で、この「どっちつかず」状態の精神力や身体感覚を身につけることは、悪くないとも思っていて。

森 それでは、公共空間に対する意識とは？

北澤 そうした感覚を抱きながらジョグジャカルタで暮らしていて、目についたのが「アンクリンガン」でした。近くの地域からこの街にやってきた行商がルーツと言われる屋台です。特にユニークさを感じたのは、アンクリンガンの持つ「内と外」の両義性です。外から見ると、シートで半分隠れた状態。内側では皆、飲み食い、おしゃべり、スマホいじり等々、本当にグダグダしています(笑)。僕には、これは人間のあるべきコミュニティの姿なのではという感覚があった。しかもそれが、シート1枚を境に都市のただ中に存在している。これ自体が社会的プラクティスとさえ言えそうだったのです。

森 内と外、公共空間と私的空間について考えさせるアンクリンガンへの興味と、ふたつの社会のあいだで「どっちつかず」になったご自分の感覚。それらを結び付けたプロジェクトということですね。

北澤 「NOWHERE OASIS」では、池袋に4台のアンクリンガンを出現させます。シートにはジョグジャカルタの日常をとらえた写真をプリントし、あちらの日常が東京の路上にワープしてくるような、でもどちらの都市でもない、そんな感覚を生み出せたらと考えています。店主役は、インドネシアから東京にきて飲食店などで働く方々に頼めたらと考えています。僕の「どっちつかず」の感覚を共有できるかもしれない人たちとして。提供する飲食物はインドネシアのもの中心で、その包み紙には、僕がこのプロジェクトのために書いたステートメントが印刷されます。

どこにもない／いまここにある、オアシス

森 タイトルの「NOWHERE OASIS」に込めた意図は？

北澤 ここでのOASISとは、言葉としては存在するけれど、実在しないものだとしてらえています。今の東京ではどこにもない＝NOWHEREなオアシスともいえる。でも一方で、ここにいる瞬間＝NOW+HEREはそれがオアシスかもしれない。そんな両義性、複数性を象徴したタイトルになっています。

森 今回は、前半にお話ししたようなかつての手法とは異なりますね。

北澤 以前は、かなり「場合合わせ」でやってきたところがありました。でも、僕自身がさらに先へ進むには、自らの作家性をよりしっかり持てたらと思ったのです。なお「NOWHERE OASIS」は「ジョグジャカルタビエンナーレ」にも参加します。そこではアンクリンガンのある東京の風景を撮影してシートにプリントし、街にインストールする。そうして2都市で行うことで、このプロジェクトの両義性や二面性を伝えられる部分もあると考えます。

森 都市は単体では存在し得ず、常に他地域との関係性のなかで成り立っていますよね。このプロジェクトは東京とジョグジャカルタという2都市間で、新たな関係性を見つけるものにもなり得るかもしれません。

北澤 池袋も、再開発など含めいろんな要素があるけれど、路上でおじさんたちが将棋を指していたりする。それが実はホームレスの方たちかもしれない、事は単純ではありません。ただ僕はああした風景に、人間って本来そういうものでしょう、という何かも感じます。そのように、東京にも以前の僕なら気づけなかった面があり、今回そうした感覚にも接続できたら良いな、と考えているんです。

(構成：内田伸一)

森 真理子(アートプロデューサー、torindo代表理事)

2007年より、シアターカンパニー「マレビトの会」ほか、舞台芸術・音楽・美術の企画制作・プロデュースを行う。2009年より京都府舞鶴市でのアートプロジェクト「まいづるRB」ディレクターを務め、地域と連携した事業を実施。2012年「一般社団法人torindo」を立ち上げ、代表理事を務める。2017年より日本財団DIVERSITY IN THE ARTSパフォーミングアーツ・グループチーフ・ディレクター。



「NOWHERE OASIS」

コンセプト・ディレクション：北澤 潤
アンクリンガン店員：レトノ・ワタナベ、ムハammad・ジダネ・マダニ、モハammad・カフイ ほか
コラボレーター：南波 圭、洪 雄大、竹田英司
プロジェクトアシスタント：遠藤純一郎、ムニフ・ラフィ・ズデイ、アニーサ・プトゥリ・チンデラカシ、アナスタシア・ユアニタ
デザイン：川村格夫
通訳・翻訳：山脇照里
記録：藤川琢史、宮澤 響 (Alloposidae)、リズキー・スル・ウィジャットマジャ
制作：荒川真由子、松宮俊文 (フェスティバル/トーキョー)、加藤夏帆 (TASKO inc.)、金井美希
インターン：植松七海、額織涼香、杉田 亮
協力：ジャワ料理専門店モンゴ モロ、アートムルデカ、アンクリンガン45バヤット、ジョグジャカルタビエンナーレ
後援：インドネシア共和国大使館
主催：フェスティバル/トーキョー

“NOWHERE OASIS”

Conceived and Directed by Jun Kitazawa
Angkringan Team: Retno Watanabe, Muhamad Zidane Madani, Mohamad Kahfi and others
Collaborators: Kei Namba, Takehiro Go, Eiji Takeda
Project Assistants: Junichiro Endo, Munif Rafi Zuhdi, Annisa Putri Cinderakasih, Anastasia Yuanita
Design: Tadao Kawamura
Interpreter, Translator: Teruri Yamawaki
Photography & Video: Takashi Fujikawa, Hibiki Miyazawa (Alloposidae), Rizky Nur Widyatmaja
Production Coordinators: Mayuko Arakawa, Toshifumi Matsumiya (Festival/Tokyo), Naho Kato (TASKO inc.), Miki Kanai
Interns: Nanami Uematsu, Ryoko Koketsu, Ryo Sugita

In cooperation with Monggo Moro, Art Merdeka, Angkringan 45 Bayat, Taman Budaya Yogyakarta
Endorsed by the Embassy of the Republic of Indonesia
Presented by Festival/Tokyo